推量形式の統語論的分析

—「だろう」と「まい」の非対称性—

田川　拓海

1. はじめに

本稿は、生成文法統語論の観点から現代日本語におけるモダリティを担う形式に対する統語論的な分析を行う。具体的には「だろう」と「まい」という形式に着目し、それらの持つ特徴が統語論的に分析されうることを示す。

日本語には時制による屈折を持たないモダリティを表す形式が存在する。「だろう」「でしょう」「まい」「(よ) う」という、「推量 (三宅(1995))」を表す形式である。本稿では特に「だろう」と「まい」に焦点を当てる[1]。

(1) a. 彼は来るだろう。
　　b. 彼は来るまい。

「だろう」は推量を、「まい」は否定推量を表し、(1b)は(1a)の否定になっている。この対応だけを見ると、「まい」は「だろう」の語彙的否定形式であるとも考えられるが、例えば両者の形成する文には次のような差が見られる。

(2) a. 昨日はきっと関東でも雨が降らなかっただろう。
　　b. *昨日はきっと関東でも雨が降ったまい。

[1] 否定意志を表す「まい」は本稿では取り扱わない。なお、分析の際には肯定の推量形式である「だろう」と比較するが、これは現代語において「(よ)う」が推量形式としてはほとんど使用されなくなってしまったからである。意志の「(よ)う」の否定として「まい」が存在することを考えると、否定推量の「まい」の対応形式もやはり推量の「(よ)う」であると考えられるかもしれないが、この点は本稿の分析に関して問題になる点ではない。

(2a)と同じ意味を表すと予想される(2b)のような表現は非文となる。「だろう」の内側には「た」が現れるが、「まい」においては不可能なのである。

他にも、「だろう」と「まい」にはいくつかの体系的な相違点が見られる。本稿ではそれらの違いが「だろう」と「まい」の持つ統語的性質と日本語の句構造から説明されることを示す。本稿の具体的な主張は以下の通りである。

(3) a. 「だろう」は、Koizumi(1993)で示唆されたような時制句（TP）の上にある機能範疇の主要部として位置する。
b. 「まい」は単一の語彙的要素ではなく、否定辞と時制辞と推量辞の三つの統語的主要部に対応する形式である。

また、このような「まい」の特性を生かして、通常の環境では現れにくい形容詞文・名詞文の構造と日本語におけるコピュラの存在について分析することが可能である。そこで Nishiyama(1999)の形容(動)詞に対する統語的分析が本稿で提示する現象によって大筋において支持されることを示す。

本稿の構成は以下の通りである。まず2節で「まい」の持つ基本的な特徴について記述する。3節では、「まい」が単一の語彙的要素ではなく、否定辞と時制辞と推量辞の三つの主要部に対応する形式であることを主張し、それによって「まい」と「だろう」のいくつかの違いを説明する。4節では Nishiyama(1999)によって提示された日本語の形容詞文の統語的特性と本稿で提示する「まい」の統語的特性から、両者が関連する現象が説明されることを示す。さらに5節では「まい」の合成が統語部門と形態部門のどちらで起こっているのか検討し、両分析の可能性と問題点を示す。6節では本稿の分析をまとめ、その理論的含意について述べる。

2. 「だろう」と「まい」の特徴

この節では「だろう」と「まい」が形成する文の相違点について観察していく。両者は(1a, b)のような単純な対応を見ると肯定、否定の差しかないように見えるが、実際には様々な点において「まい」の方に制限がある。

まず、「まい」はその内側に否定辞を生起させることができない。

(4) a. 彼は来ないだろう。
b. *彼は来ないまい。

(4b)は二重否定推量として解釈することはできず、非文となる。
また、「まい」は「だろう」と異なりその内側に過去形を生起させることもできない[2]。

(5) a. 昨日はきっと関東でも雨が降らなかっただろう。
b. *昨日はきっと関東でも雨が降ったまい。

「まい」が「だろう」と同じ性質を持つならば、(5a)と同じ意味の文として(5b)が許されるはずであるが、(5b)は全く非文法的な文である。
さらに、否定辞「ない」のみならず、一般的な形容詞も「まい」の内側にはそのままでは生起することができない。

(6) a. 明日はきっと暑いだろう。
b. *明日はきっと暑いまい。
c. 明日はきっと暑くあるまい。

「だろう」は「-い」という形態のまま形容詞をその内側にとることができるが、(6b)に見られるように、「まい」においては不可能である。形容詞を生起させる場合には(6c)のように「-くある」という形態にしなければならない。
また、同じように、形容動詞、名詞文では「だ」という形態が許されない。

(7) a. その部屋はきっときれいだろう。
b. *その部屋はそんなにきれいだまい。
c. その部屋はそんなにきれいで(は)あるまい。
d. 彼はきっと教師だろう。
e. *彼はまさか教師だまい。

---

[2] 「だろう」文においても無条件に過去形が生起するわけではない。森山(2000)を参照。

f. 彼はまさか教師で(は)あるまい。

(7a, d)のように、「だろう」文においては形容動詞、名詞＋「だ」という形式が許されるのに対して[3]、(7b, e)のように「まい」文においてはそれが許されず、(7c, f)のように「-で(は)ある」という形態にしなければならない。

このように、「だろう」と「まい」はその内側にとる補文に関してかなり体系的な相違点が観察される。特に、形容(動)詞、名詞文に関する事実は形態の選択の問題であるので、「だろう」と「まい」の間に形態論的、統語論的な違いがあることを強く示していると考えられる。

また、「まい」がその内側に否定辞、時制辞をとれないということも意味論的には説明し難い。本稿では、これらの現象は「まい」が単に「だろう」の語彙的否定ではないこと、その差が両者の統語的性質に起因していることを示していると考える。分析に移る前に「まい」の特徴をまとめておく。なお、上までで見たように「だろう」文においては(8a-d)は全て可能である。

(8) 「まい」の特徴：「まい」がとる命題内に、
a. 否定辞が生起できない。
b. （過去の）時制辞が生起できない。
c. 形容詞が「-い」という形では生起できない。
d. 形容動詞、名詞文では「だ」が生起できない。

3. 複数の主要部としての「まい」

3.1. 日本語の句構造とモダリティ形式の統語的位置

ここでは日本語の句構造と、日本語のモダリティ形式がおおよそどのような統語的位置に現れるのか、という点についての本稿の立場を述べる。

本稿では日本語の句構造について“ModalP”という範疇を提案したKoizumi(1993)に着目する。Koizumi(1993)は「だろう」「でしょう」「まい」「(よ)

[3] 「だ-だろう」という連鎖は、形態音韻論的な理由で「だろう」という形態となる（城田(1998)）。

う」という屈折を持たないモダリティ形式を ModalP という時制辞（TP）の上に投射する範疇の要素であると仮定し、日本語の節付加詞（clausal adjunct）についてその統語的位置を分析している。

日本語のモダリティ形式に関する、純粋に統語論的な分布についての体系的な研究はほとんど存在しない。よって、本稿では Koizumi(1993)の発想を取り入れ、日本語のモダリティ形式の分布を次のように仮定する。

(9) モダリティ形式の統語的分布についての仮説

a. C(omplimentizer)P レベル

C という範疇は文のタイプを表す。命令、仮定、疑問（「か」）などがこの範疇において表示される。

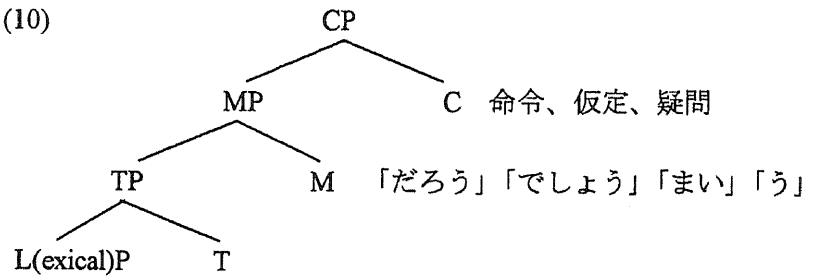
b. M(odal)P レベル

MP とは時制句の上にある機能範疇であり、モダリティ形式のうち時制の屈折を持たない要素が位置すると考えられる。

c. T(ense)P 以下の語彙範疇レベル

a, b 以外の時制の屈折を持つモダリティ形式は、統語論的な特徴は動詞や形容詞などの語彙範疇と基本的には同じと考える。

(10)



この構造についての仮定が全体としてどれほど妥当であるのかを検証するには、個々のモダリティ形式についての統語論的分析を少しずつ積み上げていかなければならいが、本稿において重要なのは、「だろう」「まい」などの

要素が、TP の上にある何らかの機能範疇に位置する、ということである[4]。

本稿ではこの構造を用いて「だろう」と「まい」の非対称性を説明していくことになる。よって、本稿の分析は(10)の構造を仮定する一つの根拠を提出することにもなる。

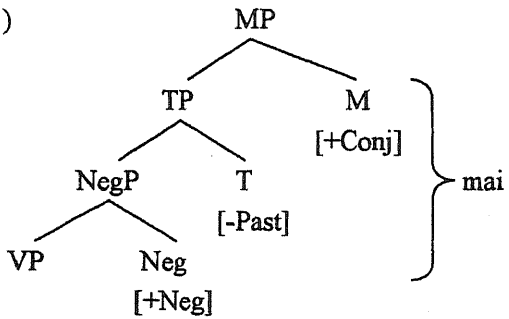
3.2. 「まい」の統語的特徴

3.2.1. 「まい」に関連する三つの主要部

3.1.で示したような構造（(10)）においては「だろう」と「まい」は全く同じ統語的特性を持つということになる。しかし、2 節で見たように「だろう」と「まい」が見せる様々な相違点については意味論的な説明は難しい。よって、本稿では「だろう」と「まい」の統語的特性からそれらの違いを説明するための分析を示す。

まず、前節で見たように、「だろう」という形式は MP にある要素であると仮定する。一方、「まい」については「だろう」（あるいは「(よ)う」）の語彙的否定ではなく、否定辞（[+Neg]）、時制辞（[-Past]）、推量辞（[+Conj]）の三つの統語的主要部に対応する音声出力であると考える[5]。

(11)



[4] この“MP”という範疇の特性はさらに理論的に明らかにしなければならない。例えば、三宅(1995)は日本語には「推量法」とでも言うべきムードが存在し、これらの要素は IP（屈折句）に位置するということを示唆している。

[5] 具体的にどのような派生を経て「まい」が形成されるのか、という点に関しては 5 節でもう少し詳しく論じる。

本稿では統語論と形態論、および両者の関係について拡散形態論（Distributed Morphology: Halle and Marantz(1993)他）の考え方を採用する。すなわち、統語部門において機能範疇には[±Past]などの形式素性のみが存在し、その後“Morphology”と呼ばれる部門においてその素性に対応した具体的な音形が挿入されるとする。

T[-Past]が含まれると考えるのは、「まい」による推量は基本的に現在、あるいは未来の出来事の推量であると考えられるからである。

(12) a. 彼も今や若くはあるまい：現在
b. 明日も雨は振るまい：未来

次に示すように、テイルのパーフェクトであれば、過去の出来事の推量を表すことも可能であるが、ル形では不可能である。本稿ではパーフェクトの場合に「過去」の意味が主要部 T によって指定されるとは考えず、上のようにしておく。

(13) a. *太郎は昨日 15km も走るまい。
b. 太郎は昨日 15km も走ってはいるまい。

また、これは「まい」が意味的にはその内側に過去の命題を取りうるということであり、「まい」の内側に過去の否定辞が現れえないという事実が意味論的観点からは説明し難いということを示している。

すなわち、「だろう」と「まい」の違いは、「だろう」が主要部 M に位置する単一の要素であるのに対して、「まい」が Neg, T, M の三つの主要部に対応する形式であるという統語的な性質の違いに起因すると考えられる。

以下、このように仮定することによって前節で観察した「だろう」と「まい」の非対称性がどのように説明されるのかということを見ていく。

3.2.2. 否定辞の出現の可否について

まず、一つ目として「まい」の内側に否定辞が生起できず、「だろう」の内側には生起できるという事実について考える。

これは上の仮定によれば、「まい」の内側にはむしろ否定辞は現れているのであるが、その否定辞を用いて「まい」が作られるということになる。まず、「まい」がとる命題内に否定辞が生起できないわけではない。

(14) a. 彼が間違っていると言えなくもないだろう。
b. 彼が間違っていると言えなくもあるまい。

(14b)のように、「まい」を用いて(14a)の二重否定の推量に対応する文を作ることはできる。しかし、やはり表面上は否定辞が一つしか存在しておらず、命題部分の一番端に位置する否定辞は「まい」に「吸い取られて」しまっているように見える。さらに、次のような現象を見てみよう。

(15) a. 彼の勝ちに違いないだろう。
b. 彼の勝ちに違いあるまい。
c. *彼の勝ちに違いないまい。
d. *彼の勝ちに違いあるということはない。

「に違いない」というモダリティ形式はその中に意味的・形態的に否定辞を含む複合辞であるが、(15d)に見られるように通常は統語的に否定辞を切り出すことはできない。しかし、「まい」と共起すると、(15b)のようにその端にある否定辞の役割を「まい」が肩代わりしてしまうのである。
これはさらに他のモダリティ形式に関しても広く見られる現象である。

(16) a. 彼が負けるはずがない。
b. *彼が負けるはずがあることはない。
c. 彼が負けるはずがあるまい。
(17) a. 彼は負けるかもしれない。
b. *彼は負けるかもしれることはない。
c. 彼は負けるかもしれまい。

このように非常に意味的に強く結びついたような表現の一部としてであれ、

「まい」と隣接する位置に否定辞「ない」が出現することは決してできないのである。このような現象は、表面上「まい」がとっている命題内の否定辞は、「まい」そのものとして具現しているという点から説明される。

よって、「まい」の内側、より厳密には「まい」に隣接する位置には否定辞が表面上現れ得ないのである。一方、「だろう」はMに位置する単一の要素であるので、次のようにその内側に自由に否定辞を生起させることができる。

(18) a. 明日は雨は降らないだろう。
b. 彼が負けるはずがないだろう。

3.2.3. 時制辞の出現の可否について

「まい」の内側に過去の時制形態素が出現できないのも、ここまで見てきた「まい」の持つ統語特性によるものであると考えられる。具体的に述べると、主要部T自身が「まい」として具現しているので、「まい」が現れている場合には時制形態素が単独で現れることができないのである。一方、「だろう」はMに位置する単一の語彙なので、その内側に時制形態素の生起を許す。

この事実は、「まい」が統語部門において複数の主要部に対応しているということを強く示唆している。なぜならば、単に「否定推量」という「まい」の意味内容を合成するには、否定要素と推量要素の二つだけで良いはずだからである。しかし、日本語の句構造では、(10), (11)において見たようにNegとMの間に主要部Tが存在する。そのため、NegとMという統語的に独立した主要部を単一の語彙に関連付けるためには、必ずTも巻き込まなければならないのである。言い換えれば、「まい」の内側に時制辞が現れないというのは、日本語の一般的な句構造に起因しているのである。

しかし、非過去の時制形態素であると考えられている「る」は「まい」の内側に現れることがある。これも通常はTに位置すると考えられているので、この「る」をどのように取り扱うかという点について考えなければならない。

結論から言えば、この形態素は主要部Tの要素ではなく、何らかの形態的な要因によって現れている、いわば見せかけの（fake）屈折であると考えることができる。次のような例を見てみよう。

(19) a. 彼は決して花子を殴*(る)まい。
b. 花子は彼には決して殴られ(る)まい。
c. 彼には思い切った批判はでき(?る)まい。

(19b, c)に見られるように、動詞語幹の後の「る」は五段動詞では省略できないが、一段動詞においては省略が可能となる。

これは純粋に形態論的な問題として処理することができる。五段動詞というのは子音語幹動詞であり、一段動詞というのは母音語幹動詞である。両者の動詞語幹と時制形態素の形態的な合成を次に示す。

(20) a. 五段動詞（殴る） : nagur (root)+ru (tense) → naguru
b. 一段動詞（できる）: deki (root)+ru (tense) → dekiru

すなわち、五段動詞の場合には「る」は語幹の一部なので、切り離すことはできないのに対して、一段動詞の場合の「る」は語幹に含まれないので、現れなくても良いのである。

ここでの分析は、なぜ「る」が生起しても良いのか、という点に関して完全な説明を与えるものではないが、少なくとも主要部Tが「まい」の内側に存在しないという根拠は示すことができたと考える[6]。

また、「まい」の直前のル形はアクセントの点でも通常のル形と異なった振る舞いを見せる。

(21) a. 明日は雨が 降┐る だろう/らしい/はずだ。
b. 明日は雨が 降る/*降┐る まい。

現代日本語において語アクセントを持つ動詞の場合、時制要素の前で必ずアクセント核が現れる（(21a)）が、「まい」に前接する場合はアクセント核は現れず、アクセント無しで発音されなければならない（(21b)）。

[6] 「まい」にどの（活用）形が前接するかについては方言差も大きいようである。城田(1998)などを参照されたい。

語アクセントの存在と統語構造が密接に関わっていると仮定する[7]と、この事実も「まい」がとるル形に統語的には時制が関わっていない傍証となる。

日本語においては時制が特定された命題だけでなく、いわゆる「非現実(irreal)」のような時制的意味と直結しない「る」が存在するということはよく知られており、それらの意味的、統語的、形態的特徴をどう捉えるかということは非常に大きな問題である。これ以上この問題について論ずることは本稿の射程を越えるため、今後の課題としたい。

3.2.4. NPIの認可について

さらに、2節では触れなかったが、本稿の分析は「まい」の否定極性項目(NPI)を認可するという特徴も捉えることができる。

(22) a. 彼は決して来るまい。
　　 b. 太郎は何も食べまい。

これは「まい」が否定の意味を含むことから当然であると考えられるかもしれないが、語彙的に否定の意味を含むだけではNPIを認可することはできないことが知られている(工藤(2000))。

(23) a. *太郎は大根しか食べ損なった。
　　 b. *決して太郎が否定するだろう。

もちろんNPIを認可する語彙的否定要素もいくつか存在するので、「まい」もそのような特殊な語彙の一つであると規定してしまうことは簡単である。しかし、本稿の分析では「まい」文はその内に統語的に否定辞を含んでいるので、そのような仮定をすることなくNPIの認可を予測できる。

形容(動)詞文、名詞文への生起に関する問題については、それらの文の統語的特徴についても詳しく分析しなければならないため、次節で改めて取り上げる。

---

[7] 語アクセントと統語構造、主要部の関係については田川(2005)も参照されたい。

4. 「まい」から見た日本語のコピュラ

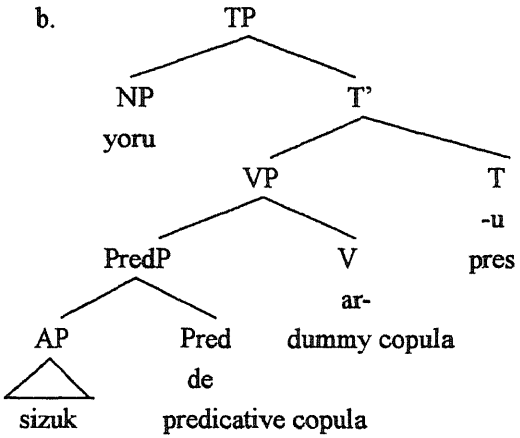
本節では、3で示した分析が、形容(動)詞文と名詞文に関連する「だろう」文と「まい」文の非対称性を説明できることを示す。

(24)「まい」の特徴（(8c, d)の再掲）
a. 形容詞が「-い」という形では生起できない。
b. 形容動詞、名詞文では「だ」が生起できない。

4.1. 日本語の形容(動)詞文の構造とコピュラ

本稿では日本語の形容(動)詞文の構造として、Nishiyama(1999)で提案されたものを採用する。Nishiyama(1999)は日本語の形容(動)詞文の統語論的、形態論的特性を詳細に分析している。そこで提案された構造は概略以下の通りである[8]。

(25) a. 夜が静かである。
b.

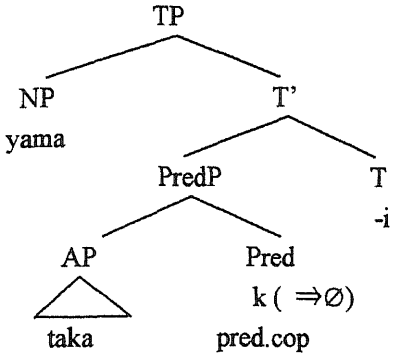


(Nishiyama(1999): 189)

[8] Nishiyama(1999)の分析が日本語の語形成に関する現象からも支持されることは田川(2005)で示した。

(26) a. 山が高い。

b.



(Nishiyama(1999): 192)

(27)a. Semantically vacuous copula (= dummy copula)
The copula appears when there is a formal (syntactic or morphological) requirement

b. Semantically contentful copula (= predicative copula)
The copula is an essential ingredient for (non-verbal) predication.

(26b)の構造を見ると分かるとおり、Nishiyama(1999)は現在時制の場合には dummy copula の出現は随意的（optional）であるとしている。この点は重要であるが、詳細は後述する。

以下ではこの分析を用いて、形容(動)詞文が「だろう」、「まい」と生起したときになぜ違う表面形が現れるのかという点について分析する。

4.2. 「だろう」「まい」と形容詞文

問題は「だろう」文には形容詞が「-い」という形式で生起可能なのに対して、「まい」文においてはそれが不可能であり、「-くある」という形態で現れなければならないということであった。

ここで最も重要なのは、4.1.で見たように形容詞の「-い」という形態は形容詞の一部なのではなく、時制形態素であるということである。すなわち、この問題も基本的には 3.2.3.で取り扱った、「「まい」の内側には時制形態素が現れない」という事実と同じように考えることができる。

ここで、まず形容詞の否定文の構造について述べておく必要がある。なぜなら Nishiyama(1999)は形容詞の否定文について明確な構造を示していないからである。本稿では形容詞の否定文の構造を(28)のように考える。

(28) a. 太郎は若くない。

b. Taroo-wa waka k ar [+Neg] (ar+[+Neg]→na)

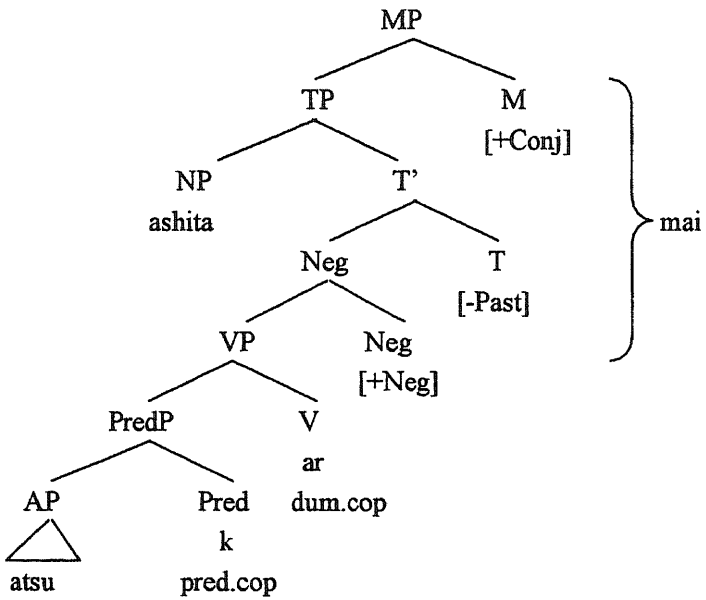
Top young pred.cop dummy.cop Neg

すなわち、形容詞の否定文においては必ず“ar”が現れ、否定辞と一緒に“na”として具現されると考える。この提案は Nishiyama(1999)の主張に反するが、その妥当性は田川(2005)で示した。このように仮定しなければ「まい」に関する現象を説明することができない。

「まい」文に形容詞文が生起した場合の構造は以下の通りとなる。

(29) a. 明日は暑くあるまい。

b.

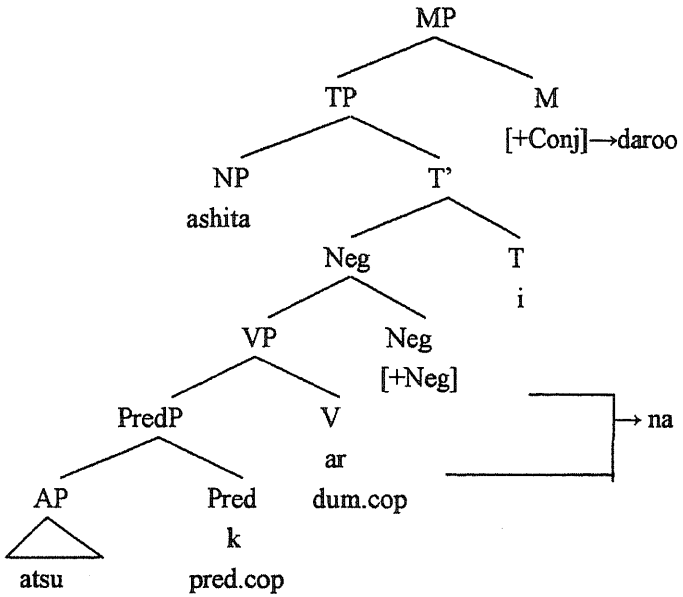


「まい」を形成するためには否定辞句が現れていなければならないのであった。その上で否定辞と時制辞と推量辞を合わせて「まい」が形成される。よって、この場合否定辞は“ar”と一緒になって“na”という形態を具現させることができない。また、時制辞も「まい」として具現されるので、形容詞の時制である「-い」という形態は現れ得ないのである。

一方、「だろう」文の構造は以下の通りとなる。

(30) a. 明日は暑くないだろう。

b.



「だろう」は単一の M の要素なので、その内側に否定辞も時制辞も独立して現れることができる。dummy copula と否定辞が“na”として具現することができるし、その時制形態素も「-い」という形態で現れることができる。

このように、3 で示した分析は「だろう」と「まい」がその内側に形容詞文をとった時の非対称性を正確に予測することができるのである。

さて、ここで dummy copula の随意性の問題について考えてみよう。そもそも、「まい」文においては dummy copula を省くと非文となる ((31))。

(31) *明日は 暑く/暑 まい。

このことから、最低「まい」文においてはdummy copulaは必須であると仮定しなければならない。また、形容詞の否定文一般についてもdummy copulaが常に存在していると考えられるということは田川(2005)でも別の現象を用いて論じた。この問題についてはさらに検討が必要であるが、複数の現象から支持されることを考えると本稿の分析は妥当であると考えられる。

4.3. 「だろう」「まい」と形容動詞、名詞文

さて、次に形容動詞、名詞文の問題を考える。この場合の問題は「だ」という形態が表れ得ない、ということであった。

まず、「だ」に関するNishiyama(1999)の議論を見よう。

(32) a. [pred.cop, dum.cop, -past, rel,cl] ↔ /na/ NA__
b. [pred.cop, dum.cop, -past, rel,cl] ↔ /no/
c. [pred.cop, dum.cop, -past] ↔ /da/
d. [pred.cop] ↔ /de/
e. [dum.cop] ↔ /ar/
f. [-past] ↔ /u/ V__

(Nishiyama(1999): 197)

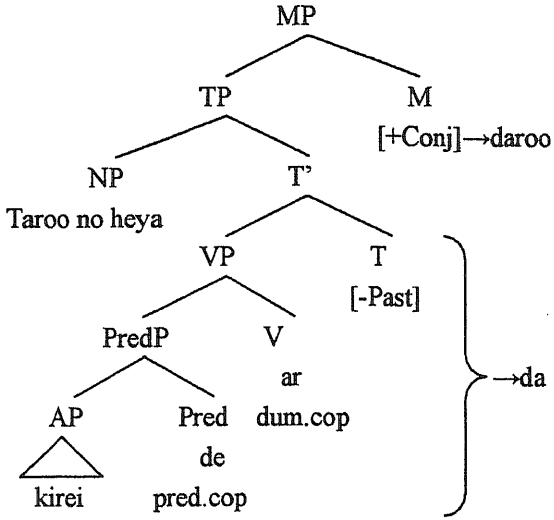
これは素性の集合とそれに対応する形態についての規則である。ここで重要なのは、「だ」は「である」の縮約形（contraction）であるとされ、その縮約には必ず[-past]、すなわちTが必要だということである[9]。つまり、「まい」の内側に「だ」が現れることができないのも、「まい」が内側に時制辞をとれないというところに起因しているのである。

まず「だろう」文からその構造を示す。(33)に示すように、「だろう」文の場合は(32c)の条件を満たしており、「だ」という形態が現れることができる。

[9] 筆者は実際には「だ」という形態が現れるには(32)に加えてさらなる条件が必要であると考えているが、ここでの議論には関係しないので割愛する。

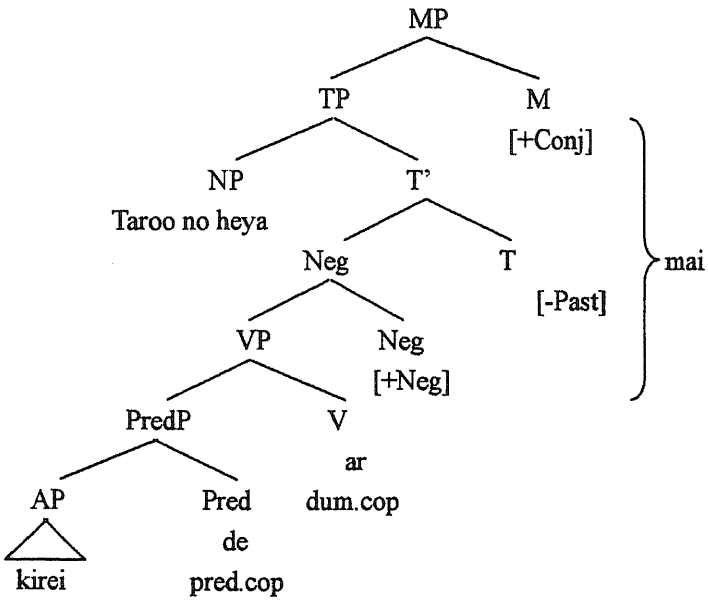
(33) a. 太郎の部屋はきれいだろう。

b.



(34) a. 太郎の部屋はきれいで(は)あるまい。

b.



「まい」文の構造は(34)のとおりである。「まい」文ではTが「まい」の具現に用いられ、またもともとdummy copulaとTの間に否定辞が挟まってしまうため、「まい」の内側のコピュラは「だ」という形態で現れることは決してできないのである。

このように形容詞文、名詞文に関する現象も本稿で提示した「だろう」、「まい」の統語的性質とNishiyama(1999)の分析によって説明することができた。

5. 統語論か形態論か

ここまでで、「だろう」と「まい」の見せる種々の相違点が語彙論的／意味論的分析によってではなく、統語論的な観点から分析されうることを示した。

しかし、「まい」という単一の語彙項目が、統語部門における派生の最初の段階では複数の独立した主要部であることを認めたとしても、具体的に「まい」という単一の音形をどのように派生するのかという点に関してはまだ二つの可能性が残されている。その可能性とは、それらの主要部が実際に統語論において主要部移動（Head Movement）を経ているのか、それとも統語部門の後の形態部門（Halle and Marantz(1993)）における形態論的操作による合成によるのかというものである。主要部移動を用いなくとも、例えばEmbick and Noyer(2001)でその存在が主張されている、"Morphological Merger[10]"という、統語構造に依存しているが、形態部門で適用される操作によっても本稿で示した分析は成立しうる。

本稿で示してきた現象は全て主要部の形態に関するものであったため、①統語部門において派生の最初の段階では、「まい」は複数の主要部である、②それらが一つに合成されて「まい」という語彙項目が挿入される、ということを仮定すればよく、その具体的な合成が統語部門で起こるのか、形態部門で起こるのかという点については選択の余地が残されているのである。

本節では「まい」の形成が統語部門で起こっていると考えられる根拠の一つとして、項側の現象に関する観察を提示する。本稿の段階ではそれらの現

---

[10] "Morphological Merger"とは音形の決定の前に適用される、"head to head lowering"であると定義される。詳細はEmbick and Noyer(2001)を参照。

象への分析を提出することはできないが、「まい」の形成が統語論的なのか形態論的なのかという点に関する重要な問題であると考え、整理しておく。

まず一つ目は、疑問文に関するものである。森山(2000)や三宅(2002)が指摘するように、「だろう」文は不定疑問文になる((35a))のに対して、「まい」文は不可能である((35b))。

(35) a. 太郎は何を食べないだろうか。
b. *太郎は何を食べるまいか。

また、Yes-no疑問文でも「まい」文の方は文法性が落ちる[11]。

(36) a. もう太郎は来ないだろうか?
b. *もう太郎は来るまいか?

これは「まい」と「か」という要素の形態論的な不適合性に起因しているのではないことは次の例が可能であることからもわかる。

(37) 明日、行こうか行くまいか迷っている。

以上のような文法的な差は、「まい」が形態部門において形成され、統語的には「ないだろう」と全く変わらないと考えると説明が難しく、統語部門においてすでに差異が存在するとする説明の方が妥当性が高いと考えられる。

さらに、「だろう」文と「まい」文においては、主格句の現れ方においても差が見られる(この現象は阿部二郎氏の指摘による)。

(38) a. 明日は太郎が来ないだろう。

---

[11] 次のような文は一見「まい」文においてYes-no疑問文が可能であることを示していると考えられるかもしれない。
a) 太郎は、こんなの食べられないだろう?
b) 太郎は、こんなの食べられまい?
しかし、これは「疑問」というより「確認要求」(詳細は三宅(1995, 1997, 2002)参照)の用法であると考えられる。「だろう」「まい」と疑問の関係は意味論的にも複雑であり(cf. 森山(2000))、さらに精密な記述と分析が必要であろう。

b. *明日は太郎が来るまい。
c. 明日は太郎は来るまい。

主格句と時制が強く関連している（Takezawa(1989)など）とすれば、この現象も「だろう」と「まい」の統語論的非対称性を支持していると言える。

しかし、本節で挙げた問題の解決についてはさらに関連する現象に関する記述を進め、日本語の疑問文や主格の認可について詳細に検討する必要があるため、稿を改めて論じることにしたい。

6. おわりに：分析のまとめと本稿の理論的含意

本稿では時制による屈折を持たないモダリティ形式である「だろう」と「まい」が示す様々な現象について統語論的な分析を提示した。

具体的には、①「だろう」が時制辞の上にある機能範疇Mに位置するのに対し、②「まい」は否定辞、時制辞、推量辞三つの主要部の具現形であるという二つの大きな仮定とNishiyama(1999)で提案された日本語の形容(動)詞文に関する理論からその全てが整合的に説明されることを示した。

本稿は今まで意味論的な研究が盛んであったモダリティ形式に関する詳細な統語論的研究のケーススタディを提示した。現代日本語におけるモダリティを表す形式は他にも多数あり、それらの統語的分布に関しては仮定するにとどまったが、さらに他の形式についても研究を重ねていきたい。

最後に、以下に本稿の研究が持つ理論的含意についてまとめておく。

(39) a. 「だろう」、「まい」という要素が時制句（TP）の上に位置するというKoizumi(1993)の仮定に対して一つの証拠を示した。
b. これまで盛んに研究されてきた（複合）動詞のみならず、単一の語彙であるモダリティ要素が複数の主要部によって形成される場合があることを示した。
c. Nishiyama(1999)で示された日本語における形容(動)詞文の構造の妥当性を示す独立した、直接的な証拠を挙げた。

【参照文献】

Baker, Mark C.(1988) Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing. The University of Chicago Press.

Embick, David and Rolf Noyer(2001) "Movement operations after syntax," *Linguistic Inquiry* 32:555-595.

Halle, Moris and Alec Marantz(1993) "Distributed Morphology and the pieces of inflection," *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser(ed.):111-176, MIT Press.

Koizumi, Masatoshi(1993) "Modal Phrases and Adjuncts," *Japanese/Korean Linguistics* 2:410-428.

工藤真由美(2000)「否定の表現」『日本語の文法 2 時・否定ととりたて』:.93-150 岩波書店.

三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183.

三宅知宏(1997)「『愛だろっ、愛っ』—推量と確認要求—」『月間言語』26:2.

三宅知宏(2002)「「ウ／ヨウ」及び「マイ」に関する覚書」『鶴見大学紀要』39:23-32.

Nishiyama, Kunio(1999) "Adjectives and the copulas in Japanese, " *Journal of East Asian Linguistics* 8:183-222.

森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法 3 モダリティ』:1-78 岩波書店.

城田俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房.

田川拓海(2005)「動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について」『筑波応用言語学研究』12 :71-84.

Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese.* Ph.D.Dissertation, University of Washinton.

A Syntactic Analysis of Conjecture in Japanese: Asymmetry between *daroo* and *mai*

TAGAWA Takumi

In this paper I propose a syntactic analysis for Japanese conjecture forms "*daroo*" and "*mai*". While *daroo* conveys merely conjectural meaning, *mai* means conjecture of a negative proposition.

A main claim of this paper is that a phonetic content *mai* is a realization of syntactic heads Neg[+Neg], T[-Past] and M[+Conj] while *daroo* is an appearance of a single head M[+Conj]. In addition, I maintain that Nishiyama's(1999) syntactic analysis of Japanese adjective sentence should be assumed in order to explain (1c) and (1d) below.

The analysis correctly derives morphological or syntactic differences between sentences in which *daroo* and *mai* occur as follows.

(1) At rightmost edge of a complement sentence which *mai* takes,
  a. a negative form "*nai*" cannot appear.
  b. a past tense morpheme "*ta*" cannot appear.
  c. *i*-form of canonical adjectives cannot appear.
  d. *da*-form of nominal adjectives and nominal predicates cannot appear.

Daroo allows occurrences of these elements in its complement.